

第7回

生命

いのち

を見つめる
フォト&エッセー

入賞作品集



主催：日本医師会・読売新聞社 後援：厚生労働省・文部科学省

協賛：東京海上日動火災保険株式会社 東京海上日動あんしん生命保険株式会社

目次

contents

表彰式	1
フォト部門入賞作品紹介	
一般の部	
・厚生労働大臣賞・日本医師会賞	2
・読売新聞社賞・審査員特別賞	3
・審査員特別賞・入選・応募者数	4
小中高生の部	
・文部科学大臣賞・優秀賞	6
・審査講評 (フォト部門)	8
・読売新聞紙面 (フォト部門)・表彰式の様子	10
エッセー部門入賞作品紹介	
一般の部	
・厚生労働大臣賞	12
・日本医師会賞	14
・読売新聞社賞	16
・審査員特別賞	18
・入選	22
小中高生の部	
・文部科学大臣賞	24
・優秀賞・読売新聞紙面 (エッセー部門)	26
小学生の部	
・文部科学大臣賞	30
・優秀賞	31
・審査講評 (エッセー部門)	34
審査員一覧	35

受賞者一覧

部門	賞	氏名	作品タイトル	
フォト部門	一般	厚生労働大臣賞	達下 才子	熱烈大好き
		日本医師会賞	松政 亜美	ちからをあわせて!
		読売新聞社賞	古賀 美奈	桜の木の下で
		審査員特別賞	遠山 薫	歓びの舞
		審査員特別賞	安野 文子	穏やかな日
		入選	石山 正昭	スズメのカップル
	小中高生	入選	山口 元広	小さなお田植協力者
		文部科学大臣賞	石川 那奈	みんなでジャンプ!
		優秀賞	福島 一誠	見つかった!
		優秀賞	櫻井 みなみ	いつまでもずっと
エッセー部門	一般	優秀賞	坂元 紀葵	鳩の巣づくり
		厚生労働大臣賞	松友 寛	命は続く
		日本医師会賞	坂野 和歌子	天国からの贈り物
		読売新聞社賞	西川 かつみ	いずれの道
		審査員特別賞	久保 紗佑実	よすが
		審査員特別賞	矢野 富久味	余命宣告から三十年
	中高生	入選	新澤 唯	後悔がなくなぐ明日
		入選	和田 つばさ	今、そこにあるありふれた奇跡
		文部科学大臣賞	山崎 恵里菜	生命と私、それから皆
		優秀賞	土井 倫太郎	僕は看護師の息子
小学生	優秀賞	福島 悠楽	言葉	
	優秀賞	奥田 杏	祖母の「ありがとう」が聞きたくて	
	文部科学大臣賞	諸根 さつき	大切な命	
	優秀賞	蛭原 文翔	君がいてくれるから	
優秀賞	青山 葉奈	わたしのこと		
優秀賞	大重 明花里	ながいきしてね、おおばあば		

※受賞者の年齢は応募締め切り時点のものです
 ※作品は原則、原文のまま掲載し、専門用語もそのまま使っています
 ※表紙のキャラクターは、日本医師会公式キャラクター「日医君 (にちいくん)」です

表彰式

令和6年2月17日 東京ドームホテル



3列目 (右から)

- 読売新聞東京本社医療部長
鈴木 雄一
- エッセー部門 小学生の部優秀賞
大重 明花里 様
- エッセー部門 入選
和田 つばさ 様
- エッセー部門 入選
新澤 唯 様
- エッセー部門 審査員特別賞
矢野 富久味 様
- エッセー部門 審査員特別賞
久保 紗佑美 様
- フォト部門 審査員特別賞
安野 文字 様
- 読売新聞東京本社写真部長
菅津 節

2列目 (右から)

- フォト部門審査員
俳優
奈緒 様
- エッセー部門審査員
俳優
水野 真紀 様
- エッセー部門 小学生の部優秀賞
青山 栞奈 様
- エッセー部門 中学生の部優秀賞
奥田 杏 様
- エッセー部門 中学生の部優秀賞
福島 悠楽 様
- エッセー部門 中学生の部優秀賞
土井 倫太郎 様
- エッセー部門 読売新聞社賞
西川 かつみ 様
- フォト部門 小中高生の部優秀賞
福島 一誠 様
- フォト部門 小中高生の部優秀賞
櫻井 みなみ 様
- フォト部門 小中高生の部優秀賞
坂元 紀葵 様
- 東京海上日動火災保険
常務執行役員
浅野 收二 様

1列目 (右から)

- エッセー部門審査員
東京大学名誉教授/解剖学者
養老 孟司 様
- フォト部門審査員
日本写真家協会会長
熊切 大輔 様
- 文部科学省初等中等教育局視学官
大滝 一登 様
- 厚生労働省医政局長
浅沼 一成 様
- エッセー部門
小学生の部文部科学大臣賞
諸根 さつき 様
- エッセー部門
中学生の部文部科学大臣賞
山崎 恵里菜 様
- エッセー部門 日本医師会賞
坂野 和歌子 様
- エッセー部門 厚生労働大臣賞
松友 寛 様
- フォト部門 厚生労働大臣賞
達下 才子 様
- フォト部門 日本医師会賞
松政 亜美 様
- フォト部門 読売新聞社賞
古賀 美奈 様
- フォト部門
小中高生の部文部科学大臣賞
石川 那奈 様
- 日本医師会常任理事
黒瀬 巖
- 読売新聞東京本社
事業戦略センター長
長井 大地

一般の部

厚生労働大臣賞

熱烈大好き



達下才子 (67歳) 岩手県

一般の部

日本医師会賞

ちからをあわせて！



松政亜美 (35歳) 大阪府

一般の部

読売新聞社賞

桜の木の下で



古賀美奈 (32歳) 熊本県

一般の部

審査員特別賞

歓びの舞



遠山薫 (68歳) 北海道

一般の部

審査員特別賞



穏やかな日

安野文字 (73歳) 香川県

一般の部

入選



スズメのカップル

石山正昭 (74歳) 愛媛県

一般の部

入選

小さなお田植協力者

山口元広(68歳) 福島県



応募者数

フォト部門(一般の部・小中高生の部)

回数	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回
応募総数	2206点	2376点	2781点	4154点	3234点	3073点	2887点

※第1～3回までは一般の部のみ

エッセー部門(一般の部・中高生の部・小学生の部)

回数	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回
応募総数	1115編	1432編	1091編	1571編	1857編	1836編	1456編

小中高生の部

文部科学大臣賞

みんなでジャンプ!



石川那奈(16歳)
大阪府

小中高生の部

優秀賞

見つかったちゃった!



福島一誠(16歳)
埼玉県

小中高生の部

優秀賞

いっまでもぎゅこつ

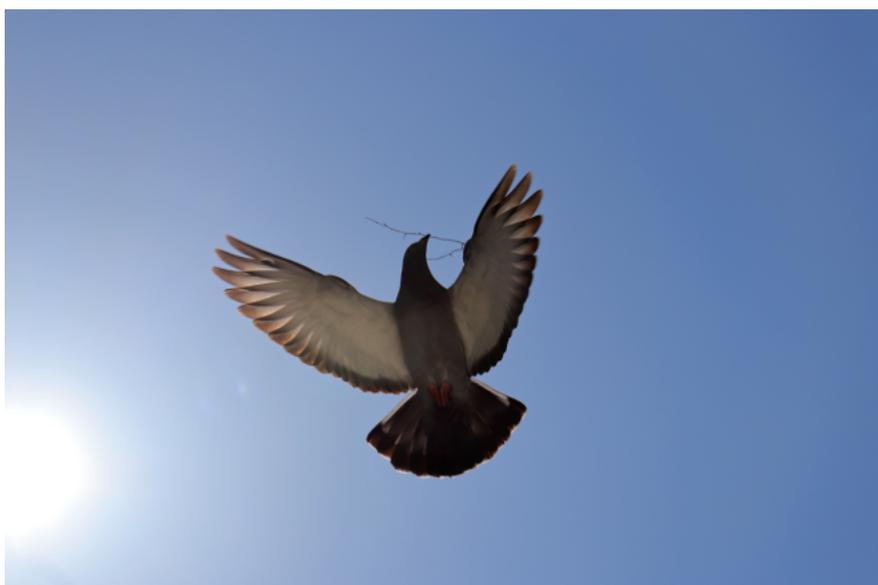


櫻井みなみ（18歳）
茨城県

小中高生の部

優秀賞

鳩の巣づくり



坂元紀葉（13歳）
千葉県



俳優 奈緒

みなさんの感性に胸を打たれ、たくさん心を動かされました。実は選考中に涙してしまう瞬間があったほどです。「桜の木の下で」のように「誕生の幸せ」を感じる作品から、「熱烈大好き」のように、「日常の幸せ」を感じる作品、「穏やかな日」のように、「人生を重ねる幸せ」について考えさせられる作品まで、改めて1枚の写真が生み出すパワーを再確認することができました。

厚生労働大臣賞「熱烈大好き」は、おじいさんとお孫さんでしょうか。お三方の表情がそれぞれ本当に楽しそうで、何気ない日常の中でこういう瞬間があることがどれだけ幸せなことなのかに改めて気付かされました。とてもユニークで可愛いしいタイトルも好きです。この場にいる誰もが笑顔だったに違いないと感じました。

日本医師会賞「ちからをあわせて！」は、車椅子を押す3人の子ども達、そして見守っているのは先生でしょうか。子ども達も力を合わせてひとつの車椅子を動かす、そして大人も子供と力を合わせて生きているんだと感じられる1枚でした。人の優しさが育まれていく瞬間を感じます。

読売新聞社賞「桜の木の下で」は、見た瞬間に命が誕生することの愛おしさが伝わってくる1枚でした。何気なくお散歩をしていたらとても幸せな瞬間に出くわしたかのように自然で、色彩も美しく、桜色、黄色と家族でお揃いの爽やかな水色が素敵です。画からこぼれる温かい春の色は家族の心の温もりを重ねているようで笑みがこぼれました。

審査員特別賞「歓びの舞」は、シンブルに浮かび上がる二羽のシルエットと水面の輝き、美しい構図にうっとりしました。タイトル通り、鳥たちがまるで歓びの舞を踊っているようですし、力強い波のしぶきとこの舞が重なる瞬間に出会えた撮影者の歓びも伝わってくるように感じました。

審査員特別賞「穏やかな日」は、ご夫婦の穏やかな一日を切り取った1枚でしょうか。後ろに続く道がまるでお二人が辿ってきた長い軌跡のように見えました。夕暮れとても美しいです。何より、お二人のお互いを想い合うその表情がとても美しいと思いました。私も「穏やかな日」に辿り着くまでの山や谷を、愛する人と越えていきたいと願わずにはいられませんでした。

文部科学大臣賞「みんなでジャンプ！」は、こんな瞬間が撮れたら家族で大笑いできますね。純度が高く写真のおもしろさを再認識できる写真でした。見事に高く飛ぶおじいちゃん、そしてこれから飛ぼうとしているお子さん。おじいちゃんの背中を見ながらスクスクと育ってほしいです。写真としても横たわる木がアクセントになっていて素敵です。

表彰式の様子



記念パーティーの様子



一般の部

厚生労働大臣賞

命は続く

松友 寛 (59歳) 愛媛県

平成27年1月。父が定期的に通っている病院から電話が入った。父の体に黄疸が見られるので急遽入院してもらったが、話があるので来てほしいという。慌てて向かった先で聞かされたのは、想定外の病状だった。黄疸は、胆管を流れる胆汁がせき止められて血液中に逆流しているためで、せき止めているのは、「悪性の腫瘍と考えると間違いないと思います。おそらく1年くらいかよ。」

「1年」が余命を指していると理解するまでに、数秒の間があった。急な展開に頭がついていけなかった。胆管がんというこの腫瘍は発見が難しく、大抵の場合、見つかった時点で厳しい状態になってい

るのだという。人の良さそうな医師の口調に申し訳なきが滲んだ。

完治を目指さない父の闘病が始まった。夏を越すまでは割合に元気だったが、医師の診立ては正しく、秋の深まりとともに父は急速に衰えていった。年を越した時点で、通院での治療は限界を迎えていた。2月の末に再入院、そして早くも3月の頭には、緩和ケア病棟を備えた別の病院に転院することになった。

「痛みが出てきて辛いだろうから、体を楽にしてくれる病院に移るよ。」と告げると、父は情けなさそうな顔で頷いた。

「ここは病気を治して退院する病院とは違うんじゃないあ。」

転院して数日が経った頃、父がぼつりとつぶやいた。緩和ケア病棟の一室。クリーム色の壁を柔らかい照明が照らしていた。この病棟では、入院患者が肉体的、精神的に少しでも心地よく過ごせるよう、看護師たちが24時間体制で面倒を見てくれる。それまでいた病院とは全く違う空気に触れ、父の表情や言動は見違えるほ

ど明るくなっていた。そんなタイミングだけに、父の言葉をどう捉えたらいいのか分からず、僕はつらたえた。

「わしはこの病院で死ぬんよ。死んで、わしの家に帰らんじゃ。」

と続けた父の口調は、しかし、意外なほど晴れやかだった。自らの死について語りながら、自棄になったような様子は窺えなかった。末期がんであることは伏せていたが、落ち着いた環境の中で自分の心や体と向き合っただけで、父は残された時間が短いことを感じ取っていたのかもしれない。

しばらくして、病院から渡された『看取りのしおり』を読んだ。そこに「死はすべての生物が必ず果たさなければならぬ大切な仕事」といった一文があった。死を悲劇的な結末としか見ていなかった僕の中から、鱗が落ちた。そして父の言葉を思い返した。あれはやはり、人生最後の仕事に臨む覚悟だったのだろう。父の穏やかな語り口が腑に落ちた。

入院して3週間。父は1日の大半を眠って過ごすようになっていた。時折目を覚ましたが、もう満足には話せない。

何かに怯えたように手で宙を引っ掻くせ
ん妄も現れ、ゴールはいつ来てもおかし
くないように思えた。

そんなある夜、父が体の痛みを強く訴
えた。看護師はモルヒネの使用を勧めな
がら、但し、と続けた。

「今の状態ですと、眠ったまま起きなく
なる可能性もあります。」

一緒にいた弟と顔を見合わせた。事実
上のお別れになるかもしれない。しかし、
父にこれ以上の我慢を強いる意味はない
と思った。

「お父さん、僕や。聞こえるか。」

父が薄目を開けた。深夜の病室は静か
で、どこからか機械の上げるかすかな音
だけが響いていた。弟は席を外している。
薬剤を投与する前に、1人ずつ父との時
間を持つことにしたのだ。命を閉じると
いつ、最後の大事な事に臨む父。そんな父
に言つべきことは何だろつと自問した。
思い浮かんだのは、他でもない、燃え尽
きようとしていた父の命についてだった。
父個人の命は絶えても、それで全てが終
わりになるわけではない。

「よう頑張ったなあ、お父さん。」

と僕は話しかけた。

「お父さんの血は僕の中に流れとるし、
僕の子どもらにも流れとる。あいつらが
大人になって、結婚して子どもができた
ら、その子らにも流れるんや。」

「僕らが元気で生きていくってことは、
お父さんからもらった命がずっと続いて
いくってことやる。やけん、なんも心配
いらんで。」

小さく父が頷いた。僕の方に顔を傾け、
懸命に口を動かす。乾いた唇が震えた。

「あんわれ。」

あんわれ？ あんわれ……そつか、が
んばれ。」か。わかったお父さん、がん
ばるよ。お父さんから受け取った命やも
んな。

ソメイヨシノの蕾が綻び始めた頃、父
の闘病は終わった。命の火が消えること
で、その尊さが際立つような旅立ちだっ
た。

あの日から7年。僕らは今も父の命と
ともに日々を生きている。

受賞作品を読んで

胆管がんの宣告は、ほぼ余命宣告に
等しい。松友さんの作品は、父の闘病、
そして緩和ケアから末期までの推移を、
冷静に、しかし温かく描いている。「わ
しはこの病院で死ぬんよ。死んで、わ
しの家に帰るんじゃ」という父親の言
葉には、尊厳が宿っている。「あんわ
れ」も、最期かい父からの激励の気
持ちをリアルに伝えている。

じつは私が描いた小説『アマターバ』
も同じ病気で同じ経過をたどる。死に
ゆく本人の目線で死を描いてみたのだ
が、松友さんのお父さんは家に帰った
あとについてはどう考えていたのだろ
う？

ふと、結婚もせず子どももない人
の命は、続かないのだろうか、考え
込んでしまった。

(玄侑 宗久)

一般の部

日本医師会賞

天国からの贈り物

坂野 和歌子 (50歳) 愛知県

拝啓

猛暑もようやく過ぎ去り、朝夕には秋の気配が感じられるようになりました。M先生、お元気でいらっしゃいますでしょうか。

早いもので春香が旅立ち、3年を迎えようとしています。先生と春香との出会いは、2013年の秋でした。春香は激しい頭痛と嘔吐に襲われ、私たちはたまたまず救急車を呼びました。救命救急センターのCT検査で脳腫瘍が発覚し、当時はあまりの病気の重さにただただ体が震え、不安と恐怖に押しつぶされそうになりました。病室に移り、憔悴しきった私たちに、先生は冷

静に優しく病状について説明してくださいました。それから数日で容体が急変し、緊急手術をすることになり、その執刀をしていただくことになりました。その後は、7年にも及ぶ春香の闘病を支えていただき、大変お世話になりました。ありがとうございます。

当時、小学6年だった春香は、術後、放射線治療や半年間に及ぶ抗がん剤治療を受け、以来、病と向き合う日々が始まりました。中学に入学してからは、学業と治療との両立に必死になって立ち向かい、その姿は、昨日のこのように目に浮かびます。体調の回復には十分な時間が必要で、なかなか思うように登校できない日々、次第に情緒も不安定になり、半年ほど不登校にもなりました。そんな状態の中でも、先生にお会いできる定期検診だけは、とても楽しみにしていました。診察日が近づくと、伝えたいことや、見てもらいたい制作作品などを考えていました。実際にお会いすると、それほど多くは語りませんでした。心の中では

とてもワクワクしていたように見えませんでした。絵を描くことが大好きだった春香、きつと、自分の想いを表現した絵や作品を、大好きだった先生に見てもらいたかったのではないかと思います。手に取って、「おお、これはすごい!」と言って下さった時の春香の笑みは、喜びに満ち溢れていました。決して長いとは言えない診察時間ではありますが、優しく温かなひと時でした。そんな思い出が蘇ると、とても幸せな気持ちになります。

高校生になると、「漫画家になる」という夢をもつようになり、目標に向かって努力する日々が始まりました。しかし、7年目に入ろうとする頃、診察室で先生から「再発の疑いがある」ことを告げられました。あの時ほど、春香との限りある時間を意識したことはありません。再び手術に挑み、成功したものの予告されていた通り右半身麻痺と失語症の障害を負いました。治療とリハビリに励む中、次第に精神症状をとまなう発作も現れ、本人をはじ

め家族もごん精神的に追い詰められていきました。その状況の中でも春香は、発作が落ち着いている時間に、左手に絵筆を持ちました。そして、絵を描き続け、亡くなる1カ月前に、『×くん』という絵本を完成させてくれました。それは、存在意義を失いかけていた主人公の×くんが、ある女の子のたった一言で勇気が湧いて、前を向いて進んでいく、そんな物語です。春香自身が、自分の存在意義と必死に向き合っていたのかもしれませんが。私たちは、春香に喜んでもらおうと、急いで印刷屋さんで5冊のみ製本してもらいました。手に触れることはできませんでした。再々発で目が見えなくなっていたので、見ることや読むことは叶いませんでした。そしてその1カ月後、18歳の若さで天国に旅立ちました。再発からたった1年でした。私たちにとって娘が残してくれたこの絵本は、宝物となりました。

「人の心に何かを刻みたい。」

「人の役に立ちたい。」

病床の枕もとで、春香は言葉が発せられなくなるまで**呟き**続けました。その後、多くの方々のご縁とお力添えにより、今夏、正式な絵本として『×くん』を出版することになりました。春香にとって絵を描くこと、それは生きる力そのものでした。絵本に込めたメッセージを多くの人に届けたいと思います。18歳で旅立ってしまった現実には、なかなか受け入れられるものではありませんが、春香の想いを繋いでいきたいと思っています。天国にいる春香から、絵本『×くん』のプレゼントです。どうぞ受け取っていただけると幸いです。

残暑なお厳しき折、どうぞお体を大切になさってください。先生の益々のご活躍をお祈り申し上げます。

かしこ

坂野和歌子

令和5年9月9日

M様

受賞作品を読んで

18歳で亡くなった愛娘の遺作となった絵本を、長年の担当医に送る手紙という形式をとっている。病院での医師との面会を楽しみにしていた娘の姿が、母の目を通して切なく描かれ、思わず涙を誘う。絵本の内容には触れられていないが、この省略が余韻を残してよい効果を生んでいると思う。

(養老 子画)

一般の部

読売新聞社賞

いづれの道

西川 かつみ (58歳) 京都府

野菜ジュースで始まる朝食から自家製お弁当、夕飯も毎食手作り、お酒もたばこも口にしなかった。睡眠不足と少し働き過ぎという以外、病気になる理由が思い当たらなかつた。なのに……。

「乳がん？ ステージⅣ？ 骨転移？ 何それ？」

医師より伝えられた瞬間、悲しみより、怒りに近い感情が口から吹き出しそうになるのを必死でこらえた。平成31年の盛夏。

「先生、末期がんとって？ 私まだ働けますー！」

主治医は黙したまま、CTの画像を指さし、

「右胸全体の白い蜘蛛の巣のような影がそれです。外科的に切除が大変難しい。すでに骨にもリンパにも転移しているのので、化学療法でお薬による治療となります。延命目的の治療となります。」

「延命って……私は死ぬのですか。」
質問は声にならず、ただ唾を飲み込んだ。

「余命宣告でしょうか？」
カラカラになった喉から、言葉を絞りだした私を、気の毒そうに見つめる主治医と看護師さん達がいた。部屋の壁が灰色に揺れて、私は意識が遠のき始めたのを感じた。

「大丈夫ですか？」
看護師さんの優しい手が、私の腕にまかれた血圧計をフウフウとやさしく膨らませてくれていた。

「大丈夫じゃないようです。この先、どうしていったらいいのか。凄く混乱しています。」

そこまですぐと、堰を切ったように、喉の奥から嗚咽が込み上げた。奥歯でこみ上げる嗚咽をかみ砕こうとするのに、

大きな嗚咽の塊が勢いよく押し出された。子どものようにしゃくり上げる私の右手を、看護師さんは強くにぎってくれた。「一番好きなことをされるのも良いですよ。」

と声をかけてくださった、優しい慰めの声になぜかは分からない苛立ちと絶望感。自分でも不鮮明で理解不能な感情が涙を押し戻した。

次の通院日まで、私は人生で初めて引きこもった。スポーツドリンクだけしか喉を通らず、布団から起き上がる気力もなく天井を眺めて過ごした。死んだように生きた。

私が過ごした30年は高校数学教師として、受験指導にあけくれた30年だった。些細な成績の差で、内申点に差を付けた。その子の明るい素直さも、内に秘めた素晴らしい才能も、眩しい経験も、数学の成績に加点することはできなかった。初任の頃、こんなに偉そうに人を判定するなんてと思った心も、年を重ねるにつれ、罪悪感は薄れていった。

闘病から1年して、私の両足の足首から先と、利き腕の右手の親指は薬のせい

か、麻痺がひどく、走ることも、鉛筆を握ることも苦勞するようになっていた。

「身体、赤点。」

「学力も最近難問解いてないから。」

自嘲気味に笑つと、涙がこぼれた。

ふと、障害者の施設ですつと暮らしている姉の顔が浮かんだ。闘病に入つてからは、自分の事ばかりで、会いにも行けなかった。ずつと昔、姉を助けるために養護学校の先生になりたいと作文に書いて、參觀日にそれを見た母が凄く喜んでくれたことを思い出した。胸がじわつと温かく緩んだ。姉のことを人に話じつらいつと感じた若かった日の自分を恥じた。自分がどの道に生まれたのか、古い記憶が教えてくれるような気がした。

「いずれの道も死にいたるなら、どの道の上で私は死にたいのか？」

自分に問つた。突然、特別支援教育の勉強がしたいとつづ思いがこみ上げた。声に出してみると、それは胸に染みた。私は通信制大学に入学手続きをとった。ただ毎日を、したいこと、精一杯今できることで埋め尽くしたいと思つた。

日々、むさぼるようにテキストと参考

書に没頭した。試験を無事に終え、教育委員会で交付された免許状を見せに、久しぶりに姉の施設へ行つた。言葉が十分理解できる筈の無い姉が、満面の笑みで私を抱きしめてくれた。

時を同じくして、主治医が定年退職のため、新しく主治医を探さなくてはならなくなつた結果、生存率がとても高いと評判のがん専門の病院に転院した。笑顔の優しい院長は、

「私もがん患者。一緒に頑張りましょう。」

と言つてくださった。そこでの薬が体に合ったのか、がんの勢いを示すマーカー値はじりじりと下がり続け、半年後の秋には、正常値にまで改善、体調も以前の状態に戻つた。奇跡だと思えた。でもこの先も再発や悪化があるかもしれない。しかし、もう良いと思つた。

「いずれの道もあの世に続く」のなら、私は自分が納得した道の上で、今日という日を精一杯に幸せに生きている。生きていこうと主治医と決めたのだから。

受賞作品を読んで

末期がんを宣告された作者は、高校の数学教師として受験指導に明け暮れた30年間を省りみる。まさにメント・モリ（死を想え）そのものである。いずれの道も死に至るなら、残りの人生をどう生きるか。そこで障害者施設ですつと暮らしている姉を想い、特別支援教育を通信制大学で学び直すことを決意する。思い切つて人生を考え直すことの大切さを具体的によく伝え、自己の新生だけでなく、安易な能力主義・成果主義の現代批判、内なる差別意識の解消など、社会的な主題を短い中で上手に消化している。

(養老 孟司)

一般の部

審査員特別賞

よすが

久保 紗佑実 (35歳) 和歌山県

先生がいるその場所は、私にとって
かけがえのない場所であった。どんな
に熱が高くても、うまく呼吸ができな
くても、心が病んでいても、そこに先
生の気配を感じるだけで私は心底安心
していられた。

重たいガラス扉を引いて、右手にあ
るちいさな受付に顔を見せる。「あら
また風邪ひいちゃった？」と薬剤師さ
んが体温計を差し出してくれる。患者
さん達がお礼も兼ねて持ってくる植物
が所狭しと置かれている待合には、年
季の入ったちいさな灰色の椅子がたく
さん並べられている。そこに座り前を
見上げると、先生が描いた旅先の絵が

壁に飾られていて、その下を患者さん
と談笑しながら看護師さん達が流れる
ように動いている。あら〇〇さん！と
世間話に花を咲かせるおばあさん達や、
お互いの症状について話し合うおじい
さん達。その人達からすれば孫ほど年
が離れている私は周囲から完全に浮い
ているのだが、それでも私はここにい
るだけで気持ちは安らいでいた。先生
がいるからもう大丈夫だと。

「さゆみちゃんまた熱かあ。血圧測る
からここに座ってー。」

看護師さんが血圧を測りながら症状
を丁寧にメモしていく。

「最近はどう？ ちゃんと食べられて
る？」

看護師さんも先生も大きな声で患者
さんの名前を呼び、一人一人に声をか
ける。そうしてその人の日常にそっと
優しく触れ、患者さん達の心をゆっく
りと整えていく。

「はい、さゆみさんー。」

先生の声が院内に響く。はあいと手
を挙げ嬉しさを隠しきれずへらへらと

パーテーションの奥へと向かう。

多くの国を学会等で旅してきた先生
は、綺麗な白髪に老眼鏡をかけ、頼も
しさを纏ったその姿はとても格好よく
私の目に映った。

はじめて行った頃は大きな声であれ
もこれも言われてしまうので恥ずかし
かったりもしたけれど、何年も何年も
先生や看護師さん達と言葉を交わして
いくうちに、いつしか自分の事までも
話すようになっていた。

当時まだあまり知られていなかった
鬱病だと精神科で診断され、進学校
だったので中退した。薬を多量に飲み
父に背負われ病院に走ることもあった。
食事もきちんと摂ることが出来ず、な
ので私はすぐに高熱を出した。ぽっか
りとした大きな恐怖と淋しさが常にそ
こにあり、自分だけではもうどうする
ことも出来なくなっていた時、私は先
生にちいさく問いかけた。私が死んだ
らさみしいかと。先生は瞬間悲しい表
情をし、それから真っ直ぐに私の目を
見て、「さゆみさん死んだら先生めちゃ

めっちゃ悲しいで。そらそつや。なんでや。なんかあるんか。先生に言うてみい。」と言った。過去に行った精神科ではあなたより酷い状態の人は山程いると言われ、カウンセリングではあなたより幼く辛い経験をした人がたくさんいると教えられた。その都度弱い自分を責め、生きていることを恥じた。目の前にいる先生はいつまでもまっすべに目を見て、決して離さなかった。

ここは町医者だ。

それから10年以上が経ち、私はもちろん夫も息子も先生に診てもらおうようになっていた。息子を連れていくととても喜んで、かわいいなあと見たこともないような笑顔で診察をしてくれた。

ちいさな変化を感じるようになったのはそんな時だった。患者さんが伝えた症状をくり返し確認するようになった。カルテの上に置くメモが増えていった。診察を終えた人の名前を呼ぶようになった。

そのちいさな変化が確信へと変わった。

てしまうより先に、この場所は閉院することとなった。

さいごに3人で挨拶にいった日。初対面のような目で先生は私を見つめ、戸惑いながら笑顔を向けた。連絡先だけでも聞いておこう。それが無理なら住所を聞き手紙を出そうと考えを巡らせていたが、丁寧に看護師さんが止めてくれた。

昔、先生は教えてくれた。先生も弱いのだということ。患者さんのことを考えると眠れない夜があること。朝起きると身に覚えのない傷があること。先生も、薬を飲んでいること。

今ではすっかり違う建物になったこの場所は、変わらず私の生きるよすがとなっている。

目を閉じると、あの重たい扉や、古びた椅子、ちいさな受付がそこに見えるような気がする。ゆっくり奥へと足を運ぶと、白衣を着た先生がそこに座っていて、こちらを見つめ、微笑んでいる。

受賞作品を読んで

読み進めるうちにじんわりと涙腺が緩み、ドラマチックでありながらも、どこか落ち着いた文体に引き込まれました。

「その人の日常にそつと優しく触れ、患者さん達の心をゆっくりと整えていく」

この描写に医療施設と患者さんの理想のかたちを見たような気がします。そつと、優しく、ゆっくりと。一朝一夕で生まれる関係性ではないでしょう。医療施設側だけに求めるものでもないのかもしれませんが。

「町医者」と、そこに勤める人々との小さな、時には深刻な症状におけるかわり合い。それが人生を変え、ほどの力があることに、どれだけの人が気付いているでしょう。

そつと、優しく、ゆっくりと。そうありたいと願っても、なかなか難しいものです。

(水野 真紀)

一般の部

審査員特別賞

余命宣告から三十年

矢野 富久味 (72歳) 高知県

「ニクシユ!?」、反射的に先生に問い返した。

「どんな病気なのでしょうか?」「がんの親戚みたいなものですね。」

先生はカルテに視線をおいたまま、さらりと答えた。とたんに診察室の空気が一変し、看護師さんの口調が急に優しくなったような気がした。

手術をしないと、あと3カ月。私が高校生の時、祖母が子宮がんで宣告を受けた時と同じK市民病院で、24年後に私も同じ宣告を受けるとは――

祖母は当時74歳だったが、すでに進行しているので手術は難しいと言われ、入院して放射線治療を受けた。

県庁所在地にあるその病院までは、

バスと電車を乗り継いで3時間以上かかったが、私もお見舞いに行った。付き添いしていた祖父の方が、「早う連れて帰りたい。」と涙を流したのが辛かった。

痩せて見る影も無くなって、いよいよ最後の日々は家で過ごすさせたいと、退院してきた。

学校から帰ると夜になったが、私はいつも祖母の傍らに居た。子どもの頃、祖母がいつも昔話をして寝かしつけてくれたように。

不思議なのだが、骨と皮のような体で寝たきりになっても、祖母は「私は死ななげ。」とはつきり言葉にした。大きな岩があつて、光が見える。自分は守られている、と言つのだ。

母など葬儀の日をいつ迎えても慌てないように、和室の障子を張り替えて準備していたが、祖母はほんとうに言葉通りに快復して、畑仕事をするほど元気になった!

役場の保健師さんはじめ、見知らぬ人まで祖母を訪ねて来るようになった。どうしてがんを治したのか? がん患者の家族は誰しも、藁にもすがりたい

気持ちになるのはよく分かる。

祖母は86歳まで元気に生きた。その姿を見てきたので、奇しくも同じ病院で同じように余命宣告された時、真つ先に思ったのは「私も死なない」だった。まだまだやりたいことがたくさんある!

病気休暇を取るために診断書をもらい、外に出ると街の景色がまったく違って見えた。

見慣れた当たり前の景色も、日々の暮らしも愛おしい。生きていることは、奇跡だ。

病気休暇が取れたので、セカンドオピニオンで他の病院も受診した。固唾をのんで、先生の診断を聞く。

ところが、先生の口調は歯切れが悪い。肉腫であるとも無いとも、はつきり言わない。疑いはあるが断定できないとおっしゃる。

専門の病院を調べたり探したりしては、受診を繰り返した。大病院やオーリングテストなんていう初めての検査まで受けたりした。まるで、多数決で病名が決まるみたいに。

7院目の診断結果を聞いた帰り道、

「何やってるんだらう私」と一人苦笑した。手術するかしないか、決めるのは私だ。私には、祖母のように大きな岩も光も見えないが、余命宣告は何か大切な意味があることだけは分かる。

手術しないと決心すると、急に心が軽くなった。生まれ育った山の村に帰ろう！

県内唯一の国立中学校での仕事はとても楽しかったけれど、睡眠時間も削る忙しさだった。過労死ラインを超えている。

豊かな自然だらけの村で、すべてのいのちを大切に「コミュニティを創って、食住衣を自給する昔ながらの暮らしに戻る」。

母校が廃校になり、その跡を譲り受けた時、いつか夢を叶えようと「はーと・らいふ村」と名付けていた。「いつか」ではなく、やりたいことは今すぐやるわー！

1996年2月、校庭の真ん中に自分で設計した自然木と漆喰の家を建て始めた。雑誌のコラムで移住を呼びかけたら、同じ夢を抱く人々が全国から訪ねて来るようになった。

その中の一人、K市からやって来た木工作家と意気投合して結婚し、家具類はすべて土佐ヒノキ間伐材で手作りしてもらった。

カチンカチンだった校庭に、裏山から腐葉土や枯れ草を運び、ふかふかの畑にした。果樹、小麦、野菜、お茶、ハーブなど、100種類以上を完全無農薬自然栽培で育てている。

毎朝起きるとすぐ庭に出て、今日は何を食べようかなーと見廻すのが楽しい。採ってすぐ食べる新鮮な野菜のおいしさは、格別だ。

お米は近くの棚田で育てている。メダカやホウネンダワラミニアマバチ、コオイムシなど、小さな生きものたちがいっぱい！

余命宣告を受けて30年。毎年特定健診を受けているが、今のところはすこぶる元気だ。コロナにもインフルエンザにもかからず、さまざまな活動を日々夢中で続けて生きている。

ひきこもる青少年自殺予防の「居場所」運営や、殺処分される犬猫たちの保護譲渡活動など、「いろんなことをしていますねー」と驚かれるが、私にし

てみれば全部つながっている。根元はひとつだ。かけがえのないいのちを、みんなで大切にして生きたい。生きていければ、なんとかなる！

受賞作品を読んで

この作品も典型的なメント・モリである。あと3カ月という余命宣告を契機にきわめて健康な人生を送っている。無農薬自然栽培の農業を行い、周囲の人たちともさまざまな関わりを持っているという、見ようによっては皮肉な話題だが、そうした否定的な面をまったく感じさせない明るさと丈夫さがある。

(養老 孟司)

一般の部

入選

後悔がつかなく明日

新澤 唯 (30歳) 千葉県

私の場合、傍から見れば命に関わる病気とは無縁の少女だった。だが私は、あの頃自分の死についてどれほど考えただろうか。

仮面うつ。それが当時の私の病名だった。仮面うつは子どもによく見られるうつ病の一種である。頻繁に風邪を引く、キレやすくなるといった症状が出るが、私の場合は後者だった。小学校の終わり頃に当時の友達と絶交した影響で、エスカレーター式で通っていた中学校でも孤立し続けていた。体には一見何の異常もない。だがいつも1人で行動し、自分に絡んでくる男子たちにキレたり学校でのストレスを家でもぶつけたりしていた。その度に、心の中でこう思っていた。

私の居場所なんてどこにもない。

中学3年の4月下旬、私はそんな対人関係に耐えられなくなり、とうとう学校に行きたくないと両親に訴えた。当然2人は大反対したが、私が大泣きした翌日からはその問題について触れなくなった。高校受験も控えているのにという2人の胸中は分かっているつもりだ。だが体が、心が、もう無理だと悲鳴を上げていた。

不登校になってからしばらくは、抜け殻のような状態が続いた。私のことを嫌っている人間からは離れられた。今の私に登校する気力も体力もな

いことは、ひとまず学校、家庭双方に理解してもらえた。だがこの惨めさはどこからくるのか。答えをみつけるのにその時間はかからなかった。私の味方は誰もいないから。

当時の私は、自分のことを少しでも叱る、あるいは「分かってくれない」人を例外なく敵視していた。両親でさえもそうだ。不登校になる以前から何度となく仮病を使って授業を欠席したことがあったが、親はその度に私に心療内科ではなく内科を受診させた。そんな経緯があり、当時の私は両親のことすらも信用していなかった。誰も私と仲良くなりたくない。誰も私のことを分かってくれない。成績は悪いし運動神経も良くない上別の能力に秀でていくわけでもない。こんな私など、生きていく意味はあるのか。いっそのこと、死んでしまえば良いのではないか。そんなことを考えながら台所の包丁を手に取り、それを自分の心臓に向けたことも何度か繰り返した。

結局死に切れないまま夏が始まることとした時、私は美家の市外にある青少年向けの心療内科に通うことになった。母が見つけてきたその心療内科は当時の中学生にとって大移動になるが、月1回でも気分転換の感覚で逆に通えるかもしれないと考えたのだそう。

実際、私はそこに通い続けることができた。平日同級生と離れられる心理的安全に加え、心療内科の先生にも比較的安心して私の思いを素直に話せた。しかし私は、その過程で別の問題に直面した。少しの間だけ周囲でできるよつになつた一方、今度は私がいかに周囲に怒りを撒き散らしてきたかということに「気付き」、悩み始めるようになったのだ。笑顔は笑顔を生むと言われているが、逆もまた然り。私は存在するだけで周りの人たちに不幸にする。だから私はやはり死ななければなら

ない。負の感情をまだ「コントロールできなかった影響はあるにせよ、このような極論に至ることも逆に増えたのだ。だが死に切れない。そうして私は、今までは少し別の形で自分は死ぬべき人間なのかどうかを考え続けた。

そんな中学卒業も近づく冬のある日、病院帰りの電車で付き添っていた母が私に言った。

「今までごめんね。お願いだから、生きて。」

今までは異なる母の口調に、私は少し戸惑った。

「学校や受験なんかより、あなたが死ぬ方が私はよっぽど辛い。あの時、学校に行きたくないって言うてくれてありがと。」

今まで想像すらできなかった、温かく力強い言葉だった。だがその時沸き上がってきた感情は、悲しみの浄化でも感謝の念でもない。後悔だった。本当に優しくしてくれる人の存在に気付こうとしなかった後悔。誰かの優しさを偽善と決めつけた後悔。そして私が苦しむことで誰かに辛い思いをさせていると想像できなかった後悔……。そんな激しい思い込みをしてきた自分が情けなくて、その場では声を殺して泣くことしかできなかった。

あれから私は大人になり、今誰の役に立っているのかと考え落ち込むこともある。それでもこれだけは言える。あの時の後悔は、どんな時も、誰に対しても温かく接しようという決意に変わった。人から言われる今の私の「優しさ」は、さながら少し悲しみの混じった冷たい雪溶け水のようなものかもしれない。しかしそれは、悲しみが凍りついた誰かの心をゆっくり溶かし、やがて訪れる春を迎えさせるものである。そのために私は今日を、そして明日を生きるのだと信じている。

入選

今、そこにあるありふれた奇跡

和田 つばさ (37歳) 埼玉県

まもなく1歳になる我が家のわんぱく君は、目下のところ、伝い歩きと、テレビのリモコンを触るのに夢中だ。産まれてからというものは、彼は自分が住む世界のあらゆるものを見て、触り、聴き、大いに泣いて笑って、毎日を全力で駆け抜けてきた。

息子が産まれてから、私の方はこれまで思いもしなかった多くのことを考えるようになった。とりわけ、「奇跡」について。奇跡とは一体何だろうか？ それまでの私は、何かしら特別なことを成し遂げることが奇跡だと思っていた。例えば、アメリカン・ドリームを達成するだとか、難病を克服するだとか、ごく少数の人が経験すること。だが、それは正しくないことに、私は徐々に気づき始めている。自分がいる今この場所にあるもの一つ一つの意味について、立ち止まって考えてみると、そこには奇跡が存在するということを突如感じることがある。息子が産まれた日から今まで、私にはそう思える瞬間が幾つもあった。

2022年、街路樹の葉が美しく色づいている頃、陣痛により私は夜明け前に入院した。出勤時刻になると担当の先生と看護師の方が、「頑張りまじょーじ。」と挨拶に来てくれた。さらにその日

は看護学校の実習日であるらしく、看護学生さんが私の担当として退院まで付き添ってくれることとなった(きつともう素敵な看護師になっているだろう)。

数時間が経ち、「とても順調に進んでいますよ。」と先生が言った。が、私には長く感じられ、内心では「まだあ？」と思っていた。それでも、初産にしてはスムーズなようで、13時頃にいよいよ分娩室に通され、夫も呼ばれた。最後は吸引分娩になったものの、15時前に、身長49cmの赤ん坊が世界に飛び出して産声を上げた。その時、私が感じたのは何よりも感謝だった。病院のスタッフさんそして10カ月もの間頑張り抜き、命がけて産まれてきてくれた息子に。体を拭いた後、私の枕元にやって来た息子。彼の体は本当に暖かかった。それに加え、細部の印象が強く残っている。耳の周囲に大人と同じように毛が生えていたこと。産まれたてなのにくしゃみができたこと。外の世界に出てきたばかりだというのに怖がりもせず、気持ちよさそうに眠ってしまったこと。

翌日、新生児室に息子を迎えに行った。初めての授乳を終え、ゲップの仕方を教わって、太腿に息子を座らせた。座った姿勢の彼の小ささに、「何？ この小さな生き物？」となぜだかとてもシユールな気持ちになった。とりわけ、着物のような産衣を着ている彼は、小さな小さな侍のように見える。夜になっても私は驚きっぱなし。産まれて2日目の赤ん坊が、こんな大音量で泣くことを知らなかったのだ。

入院4日目は初めての沐浴。学生さんがお風呂に入れてくれた。息子は泣いていたのに、お風呂につかった瞬間、手を頬に当てて気持ちよさを絵

に描いたようにうつとりと目を下げた。

無事に退院して自宅に帰ってから、特に新生児期は怒涛の日々だった。出産前、育児雑誌で1日の授乳が頻回であるのを見て、夫と2人で「たくさん飲むね。アハハ。」と笑っていたのだが、いざ自分が体験してみると、その期間は人生で一番の寝不足の日々だった。その後も、乳頭混乱、湿疹、泣いている理由がわからないなど不安に思うことが幾つもあった。人生で一番心配した日々だったかもしれない。

けれども、そんな日々の中で遭遇したのは、たくさんの奇跡だ。私の掌に置かれた息子の足の小ささ。大発見をしているかのように指をグーパーする姿。私の言葉に反応して、初めて彼が笑みを浮かべた日。初めての笑い声。これが彼の声なのだ。知った瞬間。自分で哺乳瓶を持てるようになったこと。寝返りから仰向けに戻れず、いつもビエーンと泣いていたのに、その1カ月後にはドヤ顔で寝返り返りをする姿。突然の、つかまり立ちのお披露目。「我が家を見回らねば」と言わんばかりのハイハイで、力強く動く手脚。何やら面白そうなるものを発見し、笑い声が止まらないくらいに喜びに満ちた姿。

それらの光景は、私には全て奇跡に思える。産まれて1年も経たない小さな命は、目を輝かせながら、毎日毎秒、自分の世界を広げている。身長70cmの小さな赤ん坊が自らの生命を躍動させている姿を見る時、奇跡は日々のあらゆる瞬間に存在することを私は感じる。昔から数多の人が世界中で遭遇している光景。けれども、そのありふれた光景の中に、とても神秘的で、とても大切な何かがある。

中高生の部

文部科学大臣賞

生命と私、それから皆

山崎 恵里菜 (12歳)

埼玉県 秀明中学校

私は秀明学園に通う、中学1年生の女子です。まだ骨折さえ一度も経験したことがなく、注射は大嫌いです。しかしそんな私にも、生命と真剣に向き合った経験があります。

初めて生命について深く考えたのは、8歳の頃でした。当時はまだ、両親と3人でアメリカで暮らしていました。そうしたある日、父は急に足の親指に異変を感じたそうです。医師は当初正常と見なし、私も変わらず学校生活に励んでいました。ところがある日、母はいきなり真剣な顔で私を呼びだしました。その時の言葉は、今でも忘れません。

「お父さん、がんになっちゃったんだ。」それから毎日、父の唸り声うなりこゑが聞こえる

ようになりました。歩けなくなった父をサポートするのは母でした。私はただ、部屋で怯えながら時を過ごすことしかできませんでした。数週間後、父は入院しました。母は私を連れて、毎日お見舞いに行きました。父は私の前ではいつも笑顔で、優しく接してくれました。けど手は毎回震えていて、顔も寂しそうにたるんでいました。

ある日、私と母は病院に泊まっていた。すると急に耳鳴りがして、視界がぼやけてきました。周りの騒音が倍以上大きく聞こえ、気づいたら泣きじゃくっていたのです。母はひたすら「大丈夫だよ、大丈夫だよ。」と励まし続けてくれました。その翌朝、1月15日の火曜日、パパは天国へと旅立ちました。まだ幼かった私は、病院でも、家でも、お葬式でも泣きませんでした。「まだお母さんがいる」と、そう思っただけでした。

それからすぐ、母と私は日本に帰国しました。しかし、その穏やかな生活も長続きはしませんでした。インターナショナルスクールに落ち着き、日本の生活にも徐々に慣れてきた頃、母のがんが発覚

したのです。しかも脾臓すいぞうがんでステージ4までいつていました。自由に動けなくなった母をサポートするのは、私の役目になりました。11歳になっていた私は、さすがに世間の辛さや苦しみを理解できません。

「来年は一緒に行こうね。」
そんな母の言葉を、私は信じていました。

数カ月ほど経ち、母は入院しました。残された私は祖父母の家に送られ、毎週1回お見舞いに通いました。しかし会いに行く度に母の体は弱り、父と同じようにクマができ、細くなっていくのが分かりました。

「大好きだよ、大好きだよ。」

母はそう言い続けながら、骨まで見える腕で私を抱きしめてくれました。ついそんな母を見てみると、「こんなお母さんじゃない」と心の中で否定してしまう自分がいました。

2021年の12月13日、ママも天に召されました。急いで病院に向かうタクシーの中で必死に打った最後の感謝のメッセージは、今でも覚えています。で

も結局メッセージは届かないまま、母は逝ってしまいました。病院に着いた途端、私は号泣しました。この世で最も一番愛していた父と母がいなくなった世界は、とても惨めで狭苦しい世界になってしまいました。一人きりでこの先の道を進むのは、無理だと確信したのです。

しかし、その絶望の日々はある一冊の本との出会いによって照らされました。辛い気持ちにそっと寄り添う『死にたい』『消えたい』と思ったことがあるあなたへ」という本です。数ある中で最も心に響いたのは『過去にも未来にも心を飛ばさず、今この瞬間に心を留め置くことで誰でも瞬時に幸せになれる』という言葉です。苦しい時は大体過去か未来のことを考えており、「今この瞬間」だけに執着すると落ち着いて楽になれる、という意味だと解釈しました。傷つき、疲れてどうしようもなくなった時、意識を自分の呼吸だけに向けると、あっという間に心が軽くなるのを感じました。

人間は誰でも、必ずいつか死が訪れます。私たちは常に死と隣り合わせで生きており、急に亡くなってしまつて未来なん

て怖いくらいにどうにもあるのです。そう考えると、生命は本当に貴重で大切にしなければならぬものなのだと実感します。でもそんな限りある世の中でも、生きている間にできることは無数にあるはず。何ができるか、どうしたら人の役に立てるか、私はずっと考えていました。そして決めたのです。精神科医になって、将来を背負う子どもたちの生命を救ってみせると。まだ実現化する日が遠いとしても、いつかは必ず夢を果たす。そう誓いました。

私にも生命を大切に考えられない日など、数えきれないほどあります。「一晩乗り越えるだけで精一杯、私に居場所なんてあるのだろうか」。そう考えているといつの間にか抜け穴を見失ってしまい、「病」という空間の中でさまざまう自分があります。そんな不平等と感じる世界の中でも、私は父と母の遺骨を封じたペンダントを胸に抱きながら、今日までを生きてきました。いつかは必ず幸せがやってくる、そう信じて私はいま、生命を見つめながら未来を歩んでいます。

受賞作品を読んで

アメリカで父を失い、帰国後の日本で母親を亡くした少女は小学5年生。両親がいなくなった世界は「とても惨めで狭苦し」くなったと言いつののだが、想像を絶する孤独を味わったに違いない。「骨まで見える腕で私を抱きしめてくれ」た母を、「こんなのお母さんじゃない」と思うその気持ちも、あまりに痛切である。

しかし山崎さんは絶望のなかである本に出逢い、心が軽くなるのを感じた。山崎さん、あなたが読んだ本に書かれているのはある種の「瞑想」です。「今この瞬間」は次々に変化しています。その変化に意識を載せてみてください。将来の夢も、もっと別な夢が現れるかもしれませんから、あまりこだわらないほうがいいですよ。

(文 俣 宗久)

中高生の部

優秀賞

僕は看護師の息子

土井 倫太郎 (15歳)

愛媛県 愛媛県立松山西中等教育学校

色とりどりのイルミネーションやクリスマスソングが街中にあふれている12月23日。肺がんで闘病中だった叔母が静かに息を引き取りました。明るくておしゃべり好きで、ちょっぴりお節介でよく笑う叔母でした。

「なつてしまったものはしょうがない。頑張つて治してやるわ。」

と笑顔で入院した叔母。葬儀場に帰ってきた叔母は僕の知っている叔母ではありませんでした。頬は小さく痩せこけ、肌は黒ずみ、うっすらと残る眉間の皺しわの跡が治療の壮絶さを物語っていました。口口ナ禍なごでお見舞いにも行けなかった僕は無力な自分に胸が張り裂けそうになりました。いとこたちもみんな同じ気持ちだったと思います。

押しつぶされそうな重い空気の中、母が口を開きました。

「大丈夫！ みんなでおばちゃんを元に戻してあげよう。」

僕の母は看護師です。母は叔母が亡くなつてすぐに病院へ駆け付け、エンゼルケアを自分たちでさせてほしいと病院と葬儀場の人に交渉していました。エンゼルケアとは人が亡くなった時に行う死後処置のことです。遺体を清めたり、化粧を施したりして

故人が少しでも生前に近い姿になれるように資格を持った人の手によって行われます。

母が叔母の体をきれいに清め、みんなで選んだ薄いピンクの着物を着せました。

「まあ！ お化粧するよ！」

昔の叔母の写真を何枚も何枚も見比べながらみんなですすつ化粧しました。

母は叔母の持つていた化粧品で化粧することにこだわりました。お気に入りの化粧品でいつもの叔母にしてあげたかったそうです。

まず顔全体をきれいに剃そって眉を整えました。苦痛くるしみに至いたんだあとの眉間の皺を少しすすつ少しすつ緩め、口元をマッサージュして口角が上がったようになりまし。痩せこけた頬の内側に綿を少し入れてふくらませました。テキパキと指示を出し、さりげなく仕上げをする母の手はまるで魔法みたいでした。

出来上がった叔母は声を掛けると目を覚ましそつで

「アイス食べる？ お野菜持つてお帰り。」

と今にも喋りだしそつでした。あまりに生前の叔母そのものでみんなで大笑いしてみんなで泣きました。なんだか悲しいのかうれしいのか分からないぐちゃぐちゃの感情だったけれど、胸のつかえが取れたような気がしました。

そつてお通夜のクリスマススイプ。叔母にサンタクロースの帽子をそつとかがぶせ、叔母を囲んでみんなでケーキを食べました。何種類かケーキを買つていたので誰がどのケーキを食べるかもめたり、まだ小さいとこがジュースをひっくり返したり。それはそれは賑やかで楽しいクリスマススイプでした。

葬儀が全て滞りなく終わつて片付けをしている時に母がボツリと言いました。

「私たち看護師は治療に関してはドクターの指示の

下動くので治療の決定権はなく病気そのものを治すことはできない。でもおこがましいけど患者さん本人だけでなく、それをとりまく家族さんたちも少しでも楽にさせてあげられたらうれしいですよ。それができるのが看護師だと思つてる。」

と。僕はいい看護師といつのは注射が上手いとか処置が早いとかそつうことが大切だと思つていました。もちろんそれも大事なとこだけど、今回の体験で心に寄り添う看護が一番大切だといつことに気が付きました。そして自分の仕事に自信と誇りを持ち「この仕事が好きだ。」と胸を張つて言える母をかつこいいと思ひました。

僕は心室中隔欠損症といつ先天性の心臓病を持つています。今も検査は欠かせないし、入院することもあるつてその度にたくさんの看護師さんと関わつてきました。僕の記憶に残る看護師さんはみんな笑顔で優しく、不安な僕の気持ちに寄り添つてくれました。当たり前のことのように思つていただけ、母の一言からたくさんの看護師さんの思いに触れ、感謝の気持ちでいっぱいになりました。

僕は母の仕事が看護師で嫌だと思つたことが何度もありました。時間通りに帰つてこないことも多いし、休みのはずだった日に急に呼ばれて出勤することもありました。晩ご飯にお惣菜やお弁当が続く日もあったし、家に仕事を持ち帰つていてゆつくり会話できない日もありました。

もし看護師さんのお母さんの帰りを寂しく待つている子がいるなら伝えてあげたいです。「キミのお母さんの仕事は素晴らしいものなんだよ。キミのお母さんはすごいんだよ。」と。

母は今日もたくさんの患者さんに笑顔を届けに行つています。長い夏休み、仕方なくおいしいご飯でも作つていてやるかするかな。

優秀賞

言葉

福島 悠楽 (14歳)

千葉県 松戸市立第一中学校

ぼくの母は、ぼくが2歳の時、乳がんが見つかった。リンパ節転移があり、すぐに抗がん剤治療が始まった。母は、ぼくの成長を見なければと思い、生きる為に気持ちを奮い立たせた。「あなたがいたからがんばれた。あなたは命の恩人。」と、母は時々ぼくに言う。

そんな母も、病院の先生の前で、「本当に治るんでしょっか。」と泣いたことがあったぞうだ。先生はすぐに緩和ケアの先生につないでくれて、たくさん先生や看護師の方に助けられながら母は治療を続けた。

「抗がん剤や手術の痛みはどつとどつとこほさない。体の痛みよりあなたの成長を見届けられないかもいけない」という心の痛みのほうがずっとずっと大きかった。」と、母は言った。

抗がん剤治療や手術が終わっても再発の不安は続き、がん患者の心のつらさを助ける精神腫瘍科の医師や看護師さんに、たくさん話を聞いてもらったぞうだ。

ぼくも、小学5年生の時に、右ひじの骨折で手術をした。初めての手術、ぼくは心臓がはり裂けてしまっぞうになった。この極度な緊張で心拍数が15

0に達した。それと同時に大きな「孤独」が押しよせてきた。「これからぼくはどっなつてしまっぞうのかわらない。」ぼくの中には「不安」と「孤独」しかなかった。母は、これの何倍、何百倍、何千倍の「不安」と闘ってきた。だが、時には心が折れてしまっぞうな時もあった。そんな時には、様々な医療関係者の方々に支えられながら、巨大な「不安」や「がん」に打ち勝つたのだ。

1度目の手術、整形外科の先生に「手術どつだつた？」と聞かれて、母は「手術の間ずっと孤独だつたぞうです。」と答えた。

初めての手術で、「機械の音は聞こえるけど、ずっと孤独だつた。」と母に話していたのだ。

その後、もう一度ひじに入れたピンを抜く手術が行われた。その時、先生は、手術台の上に横になっていたぼくに、その時にとこもはやってたアニメの話をしてくれたり、看護師さんが手術の緊張をすこしも感じさせないようにいろいろ話をしてくれた。ぼくの「孤独だつた」という言葉を覚えていてくれたことがわかり「孤独」なんてキレイサッパリふきとんでしまった。

手術が終わわり、手術の傷が治つたころにはすつかり腕が伸びなくなった。ぼくは、腕が元通りになるかとても心配になった。リハビリを始め、ぼくの腕を担当してくれたお兄さんはとても明るく、いつも楽しい話をしてくれて、リハビリが終つた時は、さみしくて泣いてしまっぞうになった。

ぼくの右ひじもまっすく伸びるよつになり今は、剣道やピアノも問題なくできるよつになった。

ぼくは、様々な人に助けられて生きてる。あれは、ぼくが6歳の時。

母と一緒に箱根に行った時のことだつた。

テニションが上がつてしまつたぼくは、まだ幼い体で「ゴツゴツ」とした傾斜を全力で走つてしまつたのだ。

次の瞬間、ぼくは、頭から地面に転んでしまつた。うろ覚えの記憶だが、目の前が真っ赤に染まるほど流血し、手や服、地面にまで血がしたたる、もはやドラマに出てくる殺人現場のよつになったのだ。

流血しているぼくを見つけてくれた、庭を整備していた人がぼくの頭にバンドナを巻いてくれた。その後、ぼくを受付まで運んでくださり、受付にいたお兄さんがぼくを病院まで車で送つてくれた。病院でホッチキスをする時も、ぼくが怖がらないように、看護師さんがぬいぐるみなどでぼくの気をそらしてくれた。ホッチキスを取り除く時も「痛かつたら泣いていいんだよ。」などの優しい言葉をかけていたのだ。

母は乳がんが見つかつた時、ぼくのランドセル姿を見るのが目標、中学生になつた姿を見ることは夢のまた夢で、想像することもできなかったぞうだ。

ぼくは中学生になり、母は夢のまた夢を叶えることができた。

母の病気もぼくの骨折も、大きな支えになったのは、病院の先生や看護師さんにかけてもらつた「言葉」だ。

薬は病気に効果があるかもしれない。だが、どんな万能薬でも、心の傷までは癒やせない。心の傷に効く薬はただ一つ、「言葉」だ。

母もぼくも薬では治せない心の苦しみを、たくさん「言葉」で治してもらつた。

ぼくも、「言葉」で治してもらつたよつに、苦しんでいる人がいたら、心に寄りそい、優しい「言葉」をかけられる人になりたい。

中高生の部

優秀賞

祖母の「ありがとう」が

聞きたくて

奥田 杏 (14歳)

広島県 広島県立広島観智学園中学校

「可愛いなあ。可愛いなあ。」

祖母はいつも私にこう言ってくれました。生まれた病院で分娩室には入れないため一人、分娩室の近くの椅子でなかなか産まれてこない私をずっと待っていてくれたそうです。助産師さんたちがバタバタ慌ただしくされているし、生まれたよくなに私の産声も聞こえないので祖母も焦ったと言います。いつも母の実家に行くとい日に何回言うの？と聞いて、「可愛いなあ。」と連発してくれました。

今、私の祖母は要介護5です。9年前に若年性アルツハイマーと診断されました。若かったうえ、進行を止める薬が合わなかったため、診断されて早いうちに自分で歩いたり、食べたりという生活の全てにおいて介護が必要になりました。祖母の意思ははっきりしていて、できることなら施設にはまだ入りたくないという思いが強く、祖父も私たち家族もできる限りまで家で生活してもらおうと決定しました。そこで、私と母が祖母の介護のために母の実家に住み、父は仕事と家があるの、家と母の実家を行き来する生活になりました。

祖母は一般に言われる徘徊^{はいはい}という行為も、もちろんありません。その時は母が探し回り祖母を見つけて戻って来ることも何回もありました。けれど、「徘徊」とは言いたくありません。祖母は多分、私のため家族のために、何かを買いに行ったりもの帰りの道が分からなくなり、見たことのある道を彷徨^{さまよ}ったのだと思います。

祖母は母と私で毎日風呂に入るのが楽しみになっていました。母と私で祖母を抱えて湯船に浸り、女子三世代で楽しい会話タイムでした。

ちょうど2年前の夏に、ご飯を食べなくなりましました。それまでも夕食だけに1時間半の時間はかかっていたのですが、その夏は夕食だけでも食べる時と食べない時があるので、3時間かけての夕食時間でした。食事介護をしている母も限界を感じていました。家での生活はもう無理だろうという時に、太ももとお尻の間に褥瘡^{じよくそう}(体重で圧迫されている場所の血流が悪くなったり滞ることで、皮膚の一部が赤い色味をおびたり、ただれたり、傷になってしまつこと)ができてしまいました。栄養が取れていないし、長い時間座っていたからです。

祖母は毎日9時にデイサービスの職員さんが迎えに来てくれて4時に家に帰ってくるようになりました。毎日のお風呂は、私と母ではなくデイサービスの職員さんにお任せすることになりました。私は寂しかったですが、祖母は毎日昼に入浴でききれいにしてくれるため、楽で喜んでいるようです。祖母がデイサービスから家に帰ると、かかりつけのお医者さんや訪問看護師さんたちが毎日来てくれて体の調子と褥瘡の処置をしてくれます。

少し調子の悪い時は、電話やLINEでどうしたら良いか、教えてくれるので家族みんな安心して祖母の介護ができています。

褥瘡が酷くなった時、病院や施設で見てもうのことを考えましたが、かかりつけ医の先生をはじめ、看護師さん、施設の職員の方からの支えと助言のおかげで、私たち家族は精神的にも肉体的にも救われ、祖母が望む家での生活ができています。介護は並大抵ではできません。しかし、家から祖母がいなくなったら、祖父も母もどうしたらよいか分からないと思います。今は、かかりつけ医の先生にたまに来てもらっているくらいで、訪問看護師さんには来てもらわなくて大丈夫なほど祖母は元気です。

私は昨年の春から、中学の寮に入って生活しています。長期休みに帰って祖母に会っています。母が言うには、私の食事介護なら張り切って口を開けるそうです。デイサービスの方たちも、お孫さんが帰ってきているから祖母がニコニコしていると言ってくれます。「可愛いなあ。可愛いなあ。」と今度は私が祖母に言います。祖母からは「ありがとう。」とだけは返事があります。これが聞きたくて何度も言っています。

かかりつけ医の先生、訪問看護師のみなさん、デイサービス職員のみなさん本当にありがとうございます。普段私力が力になれない分、祖父や母の支えになり祖母を家で介護ができるようにお手伝いしていただき本当に感謝しかありません。もっともっと長い間、祖母の「ありがとう。」が聞きたいので、これからも私たちを支えてくださいますようどうぞよろしくお願ひします。

小学生の部

文部科学大臣賞

大切な命

諸根 さつき (12歳)

福島県 矢吹町立三神小学校

「うちは牛の命と引き換えにお金をいただいている。牛のおかげで生活できているんだよ。」

両親に、小さい頃から言われている言葉。小さい頃は、そうなんだとは思っていなかった。しかし、私は今年、そのことを実感することになる。

私の家は、畜産業を営んでいて、黒毛和種という肉用牛を飼育している。

8月6日。この日は、家で生まれた3頭の牛とのお別れの日だった。

1頭目は福太郎。令和3年2月28日生まれ。生まれた時は小さく、とてもかわいい子牛だった。ちよつとこわがりでおとなしくてとてもいい子。2頭目は、北斗。令和3年3月16日生まれ。生まれる時、お母さん牛からなかなか出てくることができず、獣医さんが来て助けてもらった。人なつっこく優しい子。3頭目は、武蔵。令和3年3月31日生まれ。お母さんのお

なかにいる時からとても元気で、生まれた時でも大きくて、でも甘えん坊の優しい子。

3頭とも、母が人工哺育でミルクから育て、1才になると、今度は父が肉用牛にするために育てていく。そうして、2年5カ月、毎日休まず牛を育ててきた。私もそばでその様子を見ていた。そして、立派な体格になり、とつとつ出荷の日を迎えることとなる。

「福太郎と北斗と武蔵をつかまえるよ。」

出荷の日の朝、母にそう言われ、重く足取りで牛舎に向かった。そこでは、もうすでに父と母が牛たちを捕まえてロープでつないでいた。

「最後だから、ブラッシングをしてあげよう。」

母にそう言われ、ブラシで一頭一頭ていねいにブラッシングをする。

「みんな今までありがとうね、ありがとうね。」母の目は真っ赤になっていた。私もブラシで

背中や顔をこすってあげた。みんな気持ちよさそうにおとなしくしている。その姿を見ると、とても悲しい気持ちになった。

いよいよトラックに載せる時がきた。父がロープを引き、母と私で牛のおしりを押した。そして、私は父とトラックに乗り、一町にある畜産センターに向かった。トラックの中で私たちは無言だった。

畜産センターに到着し、3頭をトラックから降ろした。他の農家の牛たちに負けない体格をした3頭はとても立派で、私もとてもほろろしい気持ちになった。

3頭は別のトラックに載せられ、出荷されていった。私は、悲しい気持ちをこらえて、笑顔で見送った。それが私にできる最後のことだと思っただけだ。それから、うちは牛を育てる。そして、その命と引き換えにお金をいただく。だからこそ、自分が今精いっぱい生きることが牛への恩返しになると思っている。大切な牛の命に感謝して生活したい。

受賞作品を読んで

どの親も、生きてきた中で培われた人生哲学をもって子育てをしていると思っただけのもの、冒頭の一文にはストレートパンチを喰らいました。

3頭の牛との別れが、そして「限りある命」ではなく「限られた命」との対峙が、親御さんの教え以上の学びを筆者にもたらしたように感じました。

牛の成長の描写が細やかであればあるほど、悲しみが深まり、出荷準備が淡々と描かれるほど、読み手の胸が詰まることを筆者は意識していたのだろうか……只々感服です。

私たちの体は、人生は、何かの、誰かの犠牲の上に成り立っています。「いただきます」の意味を今一度確かめたいものです。

(水野 真紀)

優秀賞

君がいてくれるから

蛸原 丈翔 (11歳)

宮崎県 宮崎市立本郷小学校

「学校へ行きたくないし、病院にも行きたくない。」と、先日、Kは言い出しました。

僕とKは、クラスメイトで一番の仲良し。授業で分からないところを、お互いに勉強したり、宿題を2人でしたり、いつも2人で一人前。Kは心臓病で具合が悪い。僕はしゃべることができない。体を激しく動かせないKの分を、僕が体育でボールを取ってあげる。学習発表できない僕の分を、Kがスラスラと代読してくれる。毎日、毎日、支え合って学校生活を送っている。

Kが時々、体調不良になると学校を欠席する。すると、僕の学校生活は、めっちゃめっちゃになる。授業は分からな

いまま、ただ聞いているだけ。不安な中、座って会話ができずに、首を縦横に振るだけで、コミュニケーションを取れず誰とも交われない。静かすぎて、忘れ去られているクラスの中での僕の存在。

Kとは、ずっと一緒にいるからか、何も言葉を交わす必要がない。僕の目や手足の動きで、気持ちを大体、分かってくれる。学校の先生や親にも理解してもらえないことでも心が通じる。改めて思い返すと、以心伝心で一度もけんかしたことがない。

今日、各家庭と学校で、社会のZOOM授業に変わり、Kと僕が、休憩時間に、パソコン上で2人きりになった。学校とは違う雰囲気だから、お互いぬいぐるみを使って会話をしてみた。「大人になったら、2人で世界の中心へ行こう。」と、Kのぬいぐるみが言った。「うん、大人になったら行こうネ。いつも、Kが居てくれたから、学校が楽しいし、僕は学校へ行ける。」紙へペン書きし、画面へ向ける。「僕もだよ。丈翔が居るから、病気を治して学校へ

行きたい。」Kのぬいぐるみと一緒に笑って画面に出してくれる。「良かった。ずっと、ずっと、学校で一緒だよ。」筆談する。

ZOOM授業後、手を振りながら、Kが明るく前向きになって、また学校へ行きたいと言ってくれたことが、うれしかった。大人になったら、世界の中心へ行こうと約束したから、早速、社会の教科書を調べる。行ってみたい国だらけで、約10年後、世界の中心になる国は、いったいどこだろう？ 全く見当が付かないから、明日、ZOOMでKに聞いてみよう。Kはこの国へ行きたいと言っただろうか？ 2人の将来の目標ができた。Kが居てくれるから、自分の世界が広がって楽しみで仕方ない。僕の人生は前よりも、ずっと良いものになった。いつまでも友達でいて下さい。これからも、君と一緒に、たくさん思い出を作っていきたい。

小学生の部

優秀賞

わたしのいん

青山

栞奈

(8歳)

京都府 ノートルダム学院小学校

わたしは、あせがでないびょうきです。

あせがでないので、うんどうをしたり、あつい日にそとにでるとねつがでてしまいます。じんましんとかゆいぶつぶつもできます。だから、このなつは学校にほとんど行けませんでした。毎日、たくさんのかすりをはいて、毎月いたいちゅうしゃをがんばっています。がなおりません。

びょうきはがんばってもなおるびょうきとなおらないびょうきがあります。わたしのびょうきは、なかなかなおりません。つよいくすりをのんでいるので、かおがまるくなりました。せもなかなかのびません。かおのことを言

われてかなしいきもちになったこともあります。

びょうきも大きくなってちりょうをしたらなおるかもしれませんが、それまではこのままの生活をつづけます。

花火をしたり、プールにもいきたいです。

でも今のわたしはいけません。

そんなわたしがかわいそうでしょうか？ びょうきをみつけた先生が「今までたいへんだったね。」と言ってくれました。

たんにんの先生は「出きることだけがんばってくれたらいいよ。」と言ってくれました。

友だちは休みがおおいわたしがうんどうかいでダンスをまちがえたらさつとつりをおしえてくれました。

ちゅうしゃをがんばり、なかなかつたと言つとたくさんほめてくれるおねえちゃんもいます。びょうきでつらいこともおおいけれど、いろいろな人からたくさんやさしさをもらえてしあ

わせます。

わたしにはびょうきがあるけれど、

目が見えない、耳がきこえない、手足にしょうがいのある人もいることを本でよみ、知りました。

みんなそれぞれいろいろなことをがんばっています。

わたしはみんなにつたえたいことがあります。せかいにはいろいろなしょうがいやびょうきの人がいます。みんなそれぞれのあたりまえがちがいます。みた目やできないことを口に出していわれたらきずつきます。

また、しょうがいやびょうきがかわいそうなわけではありません。みんなそれぞれのしあわせがあります。できる人ができない人をそつとやさえられる、そんなやさしいせかいになってほしいです。

わたしはわたしのままでいいとおもっています。

優秀賞

ながいきしてね、おおばあば

大重 明花里（7歳）

鹿児島県 始良市立帖佐小学校

「のさい。いちねんせいになったよ。とじたえました。」

「もういちねんせいなの。おおきくなつたね。」

ひいおばあちゃんは、ここにこやさしいえがおでいいました。かぞくてたのしくおしゃべりをしていました。しばらくすると、ひいおばあちゃんが、「あかりちゃん、なんねんせいになったの。」

といいました。わたしは、「あれ、さっきじえたよ。きこえなかつたのかな」と、こころのなかでおもいました。

「いちねんせいになったよ。」
 こんどは、おおきなこえでいいました。

「いちねんせい、おおきくなったね。」
 さっきとおなじへんじでした。「ひいおばあちゃん、どうしたの。みためはいつもとおなじだけど、はなすとちよつとちがつ」わたしはふしぎなきもちのまま、いえにかえるじかんになりました。

「おおばあば、またへるね。」

おおきくをぶつてわかれました。ひいおばあちゃんがついりわらいま

した。わたしはきゆうになみだがぼろぼろあふれてきました。あえてすぐくうれしかったのに、すこしさみしくなりました。かぞくもえがおがきえてきみしそうでした。おとうさんが、

「これがとしをとるといいうことだよ。おなじことをきくのは、おおばあばがわるいわけではないよ。」
 といいました。わたしは、おなじことをなんどきかれても、いやなきもちにはぜんぜんありませんでした。わたしは、ひいおばあちゃんにだいきです。ひいおばあちゃんのやさしいえがおは、みんなのこころをたいようみたうに、あたたかくしてくれます。つきあったときも、ひいおばあちゃんは、またおなじことをきくかもしれません。それでもわたしはうっげうっげうおはなしたいです。

おおばあば、テストでひやくとんとつたよ。おともだちもたくさんできたよ。はなしたいことがいっぱいあるよ。ひゃくはらまでながいきしてね。

「おおばあばにあえるの。やったあ。」
 わたしはとってもうれしくて、ばんざいをしてよろこびました。おおばあばは、わたしのひいおばあちゃんです。ひいおばあちゃんは96さい。グループホームでくらしています。コロナウイルスをうつしたらいけないので、あいにくいことができませんでした。ひさしぶりにあえるので、わたしはわくわくしてしまいました。おとうさん、おかあさん、おねえちゃんもうれしそうでこころいえがおです。

グループホームにつくと、ひいおばあちゃんは、びっけりしたかおで、

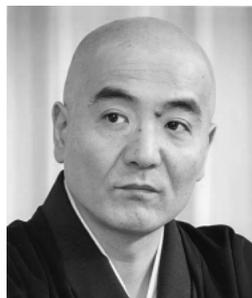
「あかりちゃん、よくきたね。おおきくなつたね。なんさいになったの。」
 ときいてきました。わたしは、

審査講評（エッセー部門）



東京大学名誉教授／解剖学者
養老 孟司

例年、応募作品を読ませていただく。力の入った、心を動かす作品が多い。私自身は年寄りなので、感動が続くと疲れてしまう。作者の想いを、決められた字数の中で過不足なく表現するには技術が要る。淡泊な作品を期待するが、これはかなり欲ばった要求で、あまり強くは言えないと思う。今年も感動させられっぱなしで、いささか疲れてしまった。



作家／福聚寺住職
玄侑 宗久

今年もさまざまな病氣、介護、出産などについての文章を拝読し、「生命を見つめる」充実した時間を頂戴した。医師や看護師、介護士の方々が支える現場、そして一つの命を取り巻く無数の人々との関わりが、今も日本各地で行なわれていることを想うと、パレスチナのガザ地区の病院への攻撃に、つい叫びたくなる。

人間が、有史以来すこしも賢くなっていないのは、まず間違いない。しかし私は、入賞作品を読み返しながら、人間の優しさや高邁トウマイさにも感じ入るのだ。縁によって鬼にも仏にもなれる人間の不思議さを、今年はとりわけ強く感じた。



俳優
水野 真紀

終わりの見えない紛争による死者数に心が麻痺しつつある今、ご応募頂いた作品から励ましを受けたような気がします。

わずか数グラムの原稿用紙、そして千何百文字が起こす奇跡とでも申しましょつか。作品に宿る生命の重みやゆくもり……それらが他人事から自分事へと昇華されるような、そんな感覚が生じるのです。様々なお立場の方の、心身のフィルターを通して奇跡でもあります。

自分のためだけではなく、誰かを慈いづしみ、認め、思いを馳はせる。自分を諦めず、誰かの可能性も諦めず最善を尽くす。多くの作品に見られる魂の交わりを感じて頂ければ幸いです。

そしてよろしければ……貴方も来年「奇跡」を起こしてみませんか？



審査員一覧

最終審査員

【フォト部門】

日本写真家協会会長	熊切 大輔
動物写真家	岩合 光昭
俳優	奈緒
厚生労働省 医政局長	浅沼 一成
文部科学省 初等中等教育局視学官	大滝 一登
日本医師会 常任理事	黒瀬 巖
読売新聞東京本社 編集局写真部長	萱津 節

【エッセー部門】

東京大学名誉教授／解剖学者	養老 孟司
作家／福聚寺住職	玄侑 宗久
俳優	水野 真紀
厚生労働省 医政局長	浅沼 一成
文部科学省 初等中等教育局視学官	大滝 一登
日本医師会 常任理事	黒瀬 巖
読売新聞東京本社 編集局医療部長	鈴木 雄一

審査員

【フォト部門】 一次審査員

フォトエディター	板見 浩史
写真家	尾崎 たまき
同上	小野 誠一

【エッセー部門】 二次審査員

日本医師会広報委員会委員長	小沼 一郎
日本医師会広報委員会副委員長	阪本 栄
日本医師会広報委員会委員	今井 俊哉
同上	岩崎 泰政
同上	内田 寛治
同上	内山 政二
同上	大西 浩之
同上	佐藤 光治
同上	白井 和美
同上	田中 吉政
同上	辻田 哲朗
同上	橋本 真生
同上	水野 重樹
同上	山科 賢児

【エッセー部門】 一次審査員

鈴木 貫一	峯崎 料子	北田 政子
吉田 春江	福渡 邦子	千葉 京子
永井 富譽子	荒川 祥子	添田 和明
篠崎 健一	針谷 文子	三枝 政行
林 友子		

※敬称略・順不同

※審査員の肩書きは2023年12月当時のものです



日本医師会からのお知らせ

日本医師会公式 YouTube チャンネル

日本医師会の活動の他、
健康に役立つ情報など
各種動画を掲載していますので
ぜひご覧下さい。



日本医師会公式 LINE

暮らしに役立つ情報を配信中。



マングローブの森づくり。 それは、豊かな地球を未来に届けること。

東京海上日動が1999年から続けているマングローブの森づくり。
小さな苗木は大きな森に育ち、多くの二酸化炭素を蓄えるようになりました。
様々な生き物を育み、豊かな恵みをもたらし、
人々の暮らしを守る役割も果たしています。

そして今も、私たちは、その森をつくり続けています。
マングローブ植林は「地球の未来にかける保険」です。

これからも、ともに未来へ。

マングローブ価値共創100年宣言



東京海上日動

www.tokiomarine-nichido.co.jp

To Be a Good Company

お客様をお守りするために

あんしん生命は、保険金や給付金のお支払いだけでなく、
病気・介護・老後などの様々なリスクやお悩み・不安から
「お客様やそのご家族をお守りしたい」という想いで、
商品・サービスのご提供に全力で取り組んでいます。

詳しくは、当社ホームページで。[東京海上日動あんしん生命](#) [検索](#)



あんしんセメエ



東京海上日動あんしん生命

東京都千代田区大手町二丁目6番4号 常盤橋タワー 〒100-0004

☎ 0120-016-234 平日9:00~18:00 土曜9:00~17:00(日曜・祝日・年末年始を除きます。) <https://www.tmn-anshin.co.jp/>

TOKIO MARINE GROUP
To Be a Good Company

第8回「^{いのち}生命を見つめるフォト&エッセー」応募規定

病気やけがをした時の思い出、介護にまつわる経験、生命の誕生にまつわる話、医師や看護師との交流など、医療や介護に関するエピソードや、生命の輝きをとらえた写真をお寄せください。

フォト部門：生命の尊さ、大切さを感じさせる写真を募集します。人間、動物、自然など被写体は自由です。また、学生のみなさんが応募しやすいように、「小中高生の部」も設けています。

エッセー部門：病気やけがをした時の思い出、介護や生命の誕生にまつわる話、医師や看護師、患者との交流など、医療や介護に関するエピソード、お世話になった医師や看護師ら宛てに送ったという想定「感謝の手紙」などを募集します。小学生の部では、「家族や自分が病気やけがをした時の話」「兄弟姉妹が生まれた時の話」「家族や自分が健康のために心がけていること」などのエピソードでも構いません。身近な生き物の話にまつわるエピソードも受け付けます。

賞：フォト部門、エッセー部門それぞれ厚生労働大臣賞、文部科学大臣賞、日本医師会賞、読売新聞社賞、審査員特別賞ほか

募集期間：2024年5月9日（木）～10月2日（水）

- 自作または応募者本人が撮影した未発表作品（ブログ・SNS発信は除く）に限ります。盗作、二重応募、類似作品の応募は固くお断りします。応募作品について、盗作等による著作権侵害の争いが生じても、主催者は責任を負いません。
 - 応募作品は返却いたしません。
 - 入賞作品についての著作権は、フォト部門は撮影者に帰属し、エッセー部門は主催者に帰属します。両部門とも、作品は主催者が自由に使用できることとします。入賞作品は、主催者が管理するウェブサイトで使用されるほか、新聞、雑誌、テレビ、ラジオ、書籍、教材などに利用されることがあります。
 - 入賞作品の発表では、新聞紙面およびウェブサイトにて、作品、実名、年齢、顔写真、学校名（小中高生の場合）を掲載します。ペンネーム、イニシャル等での応募、発表はできません。
 - 医師および医療従事者も応募可能です。
- ※応募規定の詳細は公式ホームページをご確認ください。

募集要項は5月に読売新聞紙面と公式ホームページに掲載する予定です。

※上記応募規定は、2024年4月時点のものであり、変更となる場合があります。

主催：日本医師会、読売新聞社

後援：厚生労働省、文部科学省

協賛：東京海上日動火災保険株式会社

東京海上日動あんしん生命保険株式会社

2024年4月発行

読売新聞東京本社社会貢献事業室

〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1 電話：03-3216-8598 FAX：03-3216-8979
ホームページ：<https://jigyuu.yomiuri.co.jp/photo-essay/>